

巻頭言

不易流行

【不易流行】いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと。また、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であること (Goo 辞書)。

巻頭言の依頼があった時、正直、荷が重いと思ったのだが、まあそういう年齢になったということなのだろうとお引き受けする事にした。駄文散文、ご容赦頂きたい。

惑星科学の面白みの1つは、普遍性と多様性(特殊性)の絶妙なバランスだと思っている。ほぼ同じ材料物質からできた地球型惑星の進化と現在の多様な姿はその最たる物である。1995年以降、続々と太陽系外惑星が発見され(本稿執筆時に1000を超えた)、惑星形成は普遍的なプロセスであることが明らかになった一方で、「われわれの太陽系は、あまねく存在する多様な惑星系の一形態にすぎない」というパラダイムシフトが起こった。「水」惑星とよばれる地球の誕生と進化が普遍的であるならば、この広い宇宙に生命体が我々だけってことはあり得まい。だとすれば、生物進化にも卓越した普遍性が存在するのだろうか(地球型生命と似た形態)、はたまた多様性が効くのだろうか(全く未知の生命形態)、興味は尽きない。2011年には主星の束縛を受けない浮遊惑星なる物まで発見され、我が銀河系に恒星と同程度(10^{11} 個)も存在するという(Sumi et al. Nature 2011)。惑星の概念を根底から覆すようなコペルニクスの転回点に、我々は差しかかっているようである。

さて、話は変わるが、学会や科学界の進化発展にも、普遍性と多様性の絶妙なバランスが重要だと思っている。より遠くを観る(望遠鏡)、より小さいものを観る(顕微鏡)、より遠くに行く(探査)、より濃度の低い物を観る(高感度化)、より短時間の変化を観る・より早く計算する(高速度化)、などは普遍的な技術進化の方向性であろう。しかし、大型予算がついて、猫も杓子も同じ市販装置を購入する風潮は、学会や科学界の研究スタイルが画一化することを意味し、健全とは言えない。科学の発展には多様性も不可欠で、例えば「ビッグピクチャーを描ける人材」と「重箱の隅を緻密に研究できる人材」が共存共栄し、両輪となって学問分野を牽引するべきである。

先人方のご尽力で1992年に発足した日本惑星科学会も人間に例えると、もう「成人」。今後、成熟した「大人の学会」へと持続的に進化発展を続けるには、不易流行の精神で、「10を15や20に発展させる」メインストリームを踏襲しながら、「0から1を生み出す」萌芽的な minority にも優しい時空間を醸成することが必要不可欠である。外縁天体のような minor bodies や、他分野から参入してきた、どこの派閥にも属さない「浮遊惑星」にもハビタブルな学会であって欲しいものである。

10月某日 泡盛のグラスを傾けながら...

寺田 健太郎(大阪大学大学院理学研究科)